

奈良山岳会と峽彩山岳会の徽章について

奈良山岳会と峽彩山岳会は其々に会の顔と言われる誇りの徽章がある。奈良山岳会は国宝百済観音の後背を支える竹状の支柱下部に山岳紋様を模し、其の模様を徽章としている。峽彩山岳会は般若の徽章、其々に個性あふれる画題としている。

奈良山岳会

奈良山岳会の設立は昭和八年〔1933〕一月、この時は山岳紋様の徽章は未だ無かったと思われる。二年後の昭和十年に現在も継承されている徽章のデザインである法隆寺百済観音後背を支える竹状の支柱下部に山岳図がこの年に登場している。このことは奈良山岳会会報山上第十三号に詳しい。山岳図はあったが・と山上に記載されているが、果たして山岳紋様が現在の徽章の姿になったのは何時なのかは不明。それにしても山岳紋様の徽章は美しい、下地に黒色で、山岳紋様は金色で光輝く。徽章の横の幅は 2.6 ㌘・縦は 6 ミリと小型ながら品格が漂う。この徽章の工法は〔ダムシン〕仕上げと言う。この記事を書くことを思い立ったのは平成 26 年 6 月に、梅屋則夫氏の案内で前鬼へ訪問、その帰路は憧れの法隆寺へ。目的は百済観音の下部近くの山岳紋様であり、其の紋様をそっくり真似たのが奈良山岳会の徽章であり、それらは故米沢清さんから何回も聞いていたので知ってはいたが、改めての訪問は感動であった。百済観音は別格なのかアクリルのケースに収まっていた、久しぶりに対面をした。目線はケースの中に立つ光背の下部の山岳紋様へ。あった、見つけた、急ぎ眼の中へ記憶を焼き付けた。百済観音の光背を支える柱は竹幹を模し、支柱の下部に一巡し山岳紋様が彫られている。それは中国南北朝時代を思わせる山岳表現と思える、したが

って記録と残る日本での唯一最古の山岳紋様とされている〔百済観音は樟材^{くすのきざい}で作られ、竹幹を模した支柱山岳紋^{かやざい}は樞材と言われている〕。現会長の宮西節子さんが奈良山岳会に入会した年は、昭和四十九年〔1974〕に第九回交歓登山が、池郷川と前鬼周辺の記念の交歓登山があり、その折、本望も初めての奈良へ訪問、前鬼の地で五鬼助義价〔五郎さん〕と宮西さん二人が七輪の炭火をウチワで扇いでいたのは今でもハッキリと覚えている。この頃に山岳紋様の正章と鹿が跳ねる副章の徽章が既に存在していたと宮西節子さんが語ってくれた。今となっては徽章の明解なる由来は知る由も無く、黄泉路に旅立った先輩諸氏には親しく話を聞くこともできない。困り果てて宮西会長と梅屋則夫氏に連絡し重要な情報を得た。それは山口健次郎氏からの情報であり、氏は〔みなかみ〕を創刊号から全て所蔵していると言う。山岳会の創立は昭和八年 1 月 10 日となっており、設立趣意書を発送した日を創立日としたらしい、翌年の昭和九年 7 月に『奈良みなかみ会』と『奈良山岳会』が合併し、其の創立記念号の 13 号から法隆寺の山岳図が使われたらしい。徽章の製造元は地元奈良市の野崎商店であり、店主の話によると昭和 40 年頃に現在の徽章が作られたと、語ってくれた。その後に今から 25 年前に梅屋則夫氏が注文しようとしたら現在は徽章の金型が無くあきらめたらしい。疑問に思えるのは国宝指定品の山岳紋様を一般の山岳会が使っているということ。奈良山岳会の設立は昭和八年、創立当時の会員の中に文化財などの関係者、〔県庁・法隆寺〕が居て、山岳紋様を知り得る人がいたと思われる。山岳を趣味とする者には、地元の法隆寺の山岳紋様はうってつけの材料であり最初は会報の表表紙に使い、後に徽章に使用したと思われる。最も文化財保護法は昭和 26 年〔1951 年〕6 月であり、其の以前は自由に使えたのかもしれない。思いつくままに部外者の本望が歴史ある奈良山岳会の徽章の経緯と、疑問を書かせてもらった。後日に徽章のはっきりした由来の記録が出てくることを切に願う。

注・[山上]は年報で、[みなかみ]は年数回発行する会報である。

奈良山岳会徽章と百済観音 [故西田昌二氏からの記録を引用]

奈良山岳会の徽章は、飛鳥時代の山岳模様図に決定した。この山岳模様は次に記すように奈良、大和にゆかり多いだけに、奈良山岳会の徽章としてふさわしいのである。

大和、法隆寺の百済観音が飛鳥時代の仏像彫刻の代表的遺品の一つとして著名である。

殊にその光背の竿、即ち支柱が竹幹を模した意匠になっている、其の擬竹幹の竿下部に山岳図の彫刻がある。

この山岳図彫刻の天地の高さは、約一寸八分[55[㍉]]と言う狭いもので、図に黒く現わした所が陰刻になっている

のであるが、其の刀法は極めて鋭く、一つ一つの線に驚くべき力が感じられる。

一見、ただの曲線と直線を用いた図柄であるが、この曲線は言うまでもなく山を表し、それに付した鋭い角度のある形は岩を表し、上方の水平な線は空を現したものと解せられる。

実に山岳図として他に求める事の出来ない原始的な明瞭な表現である。

法隆寺を訪れる機会を持たれたら百済観音に親しく接して、其の光背の支柱の最下部、台座と接する所に目が注がれるよう。其処に山岳彫刻が描かれている。

資料は清岡幸司氏提供。

国宝法隆寺百済観音光背の支柱の基部に一寸八分(約 55[㍉])の山岳模様・・・





峡彩山岳会

峡彩山岳会の誇りの徽章は般若である。般若と言えば奈良市内にある般若寺を思い出すが、全く関係なく般若寺は文殊菩薩を奉り其の胎内に大般若経を納入し…それ故に寺の名は般若寺となったらしい。

般若の由来は新潟県内在住の越後支部 JAC〔日本山岳会〕は、戦後の昭和 21 年「1946 年」に全国で二番目の日本山岳会越後支部として発足し、会員は県内の各山岳会の重鎮達であり指導者でもあった。

登山ブームもあって、新潟市内でも山岳会が欲しいと大勢の声があり、さて、それで名前が色々考えられ、各種の案が出されたが〔^{たに} 峡を ^{いろど} 彩る〕峡彩山岳会と名付け、昭和 28 年「1953 年」に発足した。内容は一年中お山に行くので、家庭を守る御カミサンは何時もおかんむりで角を生やす、つまり怖い女が口を大きく裂け恐ろしい鬼女であり、それでも其れにめげず好きな山に行った故に般若に決めたという。

発案者は故 佐藤一栄氏であり、幸な事に会員で徽章など製造販売を生業としていた人がいた。それで

きょうさい きょうさい
[恐妻]と[峡彩]と読みは同じく、眼光鋭く格調の高い般若の徽章が出来た。正式に峡彩山岳会と命名、当時は妻帯者などが正会員であり、独身者は見習い会員と位置付けていた。

本望が入会時には、正会員・見習い会員の制度は無く、見習い会員の制度は10年ほどで自然消滅したと見られる。

創立と同時に般若の徽章は出来たのかは不明だが…創立直後と思われる、般若の徽章は六十年以上を経た現在も会員の誇りとなって、安全登山・高德登山を心に刻み、春夏秋冬一年間の計画を会員は謙虚な気持ちでお山を楽しみ実践している。奈良山岳会は正章と副章があるが、峡彩山岳会は正章のみであり、其の般若は純銀と洋銀の二種類あり、会員の胸に会旗にも、六十周年記念の手拭にも般若が描かれて、常に会員の目に触れ、心のよりどころになっている。

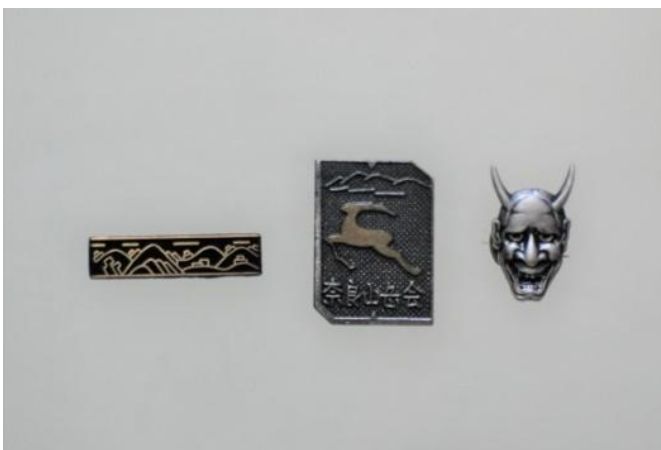
※両山岳会の共通した現在の悩みは、徽章の在庫は無く、金型は既に無く、料金の負担が有る。それらは次期の会員達に委ねたい、先輩から受け継いだ山岳敬慕への思いは末永く続くことを切に願う。

峡彩山岳会 本望英紀

徽章原寸



徽章拡大



両山岳会の共通した現在の悩みは徽章の…金型は無く、
料金の負担が有る、それらは次期の会員にゆだねたい…
先輩から受け継いだ、山岳への思いは続くことであろう。



だねるしかな両山岳会の共通した現在の悩みは徽章の…金型は無く、料金の負担が有る、それらは次期の会
員にゆい…それでも先輩から受け継いだ、山岳への思いは続くことであろう…





株式会社・野崎商店謹製・奈良市東向北町・0742-23-1343 番



文化財保護法は昭和 26 年6月で、

株式会社・野崎商店謹製・奈良市東向北町・0742-23-1343 番

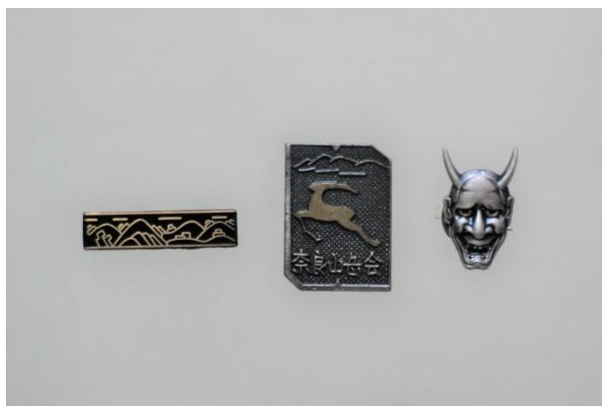
「八十周年記念のバンダナについて」 清岡幸司氏作成
奈良山岳会が 1933 年に創立されて 80 年になります。
これを記念してバンダナを作りました。

奈良山岳会の徽章のロゴは飛鳥時代の傑出した仏教彫刻の百済観音(法隆寺)に深く関与しています。
百済観音の光背を支える支柱が竹竿を模して作られていて、その基部に一寸八分(約55ミリ)の大きさの山岳模様が彫られています。



この山岳模様をモチーフにした図柄が奈良山岳会のロゴマーク、即ち徽章です。当会員の女性がこのロゴマークを周囲に配しクライミングギヤーを散りばめた意匠に仕上げました。いつも手元に置き八十周年記念の思い出としてご愛用ください。

※ 以上の資料は宮西節子、梅屋則夫、山口健次郎、清岡幸司 各氏からの提供。



かや
榧

ひのき
檜

ひのき
檜

くすのき
楠